

關於初期的中国古典小説研究会 —并对中国古典小説研究動態刊行会

大塚秀高

中国古典小説研究会と中国古典小説研究動態刊行会（以下でこのふたつの会をまとめて指したい場合は両会とよぶことにする）について、筆者はすでに『中国古典小説研究』第20号（2017年3月）所収の「中国古典小説研究30年の回顧と展望—個人的な研究状況の紹介を中心に—」（以下では拙文一とよぶ）ならびに『アジア遊学』218号「中国古典小説研究の未来21世紀への回顧と展望」（2018年5月）所収の「中国古典小説研究会誕生のころ—あわせて『中国古典小説研究動態』刊行会について」（以下では拙文二とよぶ）、とりわけ後者でその成立までの経緯ならびにその後のあゆみにつき述べたことがある。前者は2016年9月に神奈川大学主催、中国古典小説研究会共催で開催された国際シンポジウム「中国古典小説研究三十年の回顧と展望」における筆者の基調報告を活字化したもの、後者もそれにもとづくが、前者と重複しないよう大幅に加除を加えたものである。したがって、上記両会の成立に係る大要については、筆者として語るべきことはさほど多くないのだが、このたび、畏友鈴木陽一氏（以下では恐れ多いが鈴木さんとよばせていただく）から直々に、『人文研究』の退休記念号に初期の中国古典小説研究会について書いて欲しいとの依頼をうけたため、君命黙しがたしというわけで、二番煎じの虞なしとしないが、以下では先の拙文二篇では十分に触れられなかつたいくつかの点について補記

しておくことにしたい。

鈴木さんが『アジア遊学』の巻頭を飾る、自身の「中国古典小説研究三十年の回顧一次世代の研究者への伝言」で示唆されているように、中国古典小説研究会の成立（1987年）と神奈川大学外国語学部中国語学科の成立（1988年）には、1987年当時には東京大学東洋文化研究所の教授であり、翌年定年と同時に外国語学部に発足したばかりの中国語学科に移られた尾上兼英先生が深く関わっていた。鈴木さんは1982年8月に前任の松山商科大学から神奈川大学に移られ、先任の先日亡くなられた山口建治さん（以下では筆者と同年配の研究者については「さん」でよばせていただく）とともに、学科開設の下準備にあたられた。鈴木さんは都合四十年近くに亘って神奈川大に奉職され、学部長、学長補佐、副学長を歴任された。この間、中国語学科は1993年に修士課程、1995年に博士課程を開設し、1998年には学科創設十周年記念として『中国通俗文芸への視座—新シノロジー・文学篇』など三冊の論文集（語学篇・文学篇・歴史篇）を東方書店から出版するなどし、今や押しも押されもせぬ私大中国語学科の雄となつたわけである。とはいえた時の流れはとどめ難く、中国語学科の創設に関わったメンバーも、鈴木さんが最後のひとりとなってしまった。学外者である筆者が申すまでもなく、鈴木さんはいわば遺言として神奈川大学外国語学部中国語学科開設の経緯につき自身なんらかの文章をまとめられるであろう。それゆえ、筆者としては、鈴木さんの要望にしたがい、筆者と肩をならべその成立・発展に深く関わり、後には筆者の後を承けて二代目の代表となった中国古典小説研究会につき、いま少し詳しく述べることにしたい。

『中国古典小説研究』第2号（1996年7月）に「中国古典小説研究会夏合宿十年の歩み」という、事務局がまとめた、1986年から1995年の夏に行なわれた夏合宿の記録が掲載されている。そこには、筆者が拙文二でそ

の大要を記した、第1回の信州大学農学部野辺山実習施設ならびに第2回の武藏学園赤木青山寮での合宿を含む、第10回までの合宿の日程、開催地、ならびにテーマにしたがい、あるいは個別発表として発表された発表の題目、発表者ならびに司会者の氏名が記録されている。それによれば、第3回が神奈川大学富士見研修所、第5回、第7回、第9回が神奈川大学箱根保養所、第4回と第8回が奥羽大学附属研修所無垢苑で開催されたことになっている。以後は会員の有志が赴任先の大学の研修所ないしは地元の温泉宿舎などと交渉し、そこで開催されるケースが多くなったが、初期のこの時期は神奈川大学が突出している。これはすべて鈴木さんのお蔭である。

神奈川大学の研修所は、当然ながら神奈川大学の学生と教員が優先で、しかも夏休み時期の予約は、確か7月以降にしか受け付けないことになっており、テニスコートなどの運動施設がそなわった富士見研修所を参加人員がぎりぎりまで確定しない夏合宿の会場に押さえるのは至難のわざであった。そこで富士見研修所については一回であきらめ、第4回で好評だった奥羽大学附属研修所無垢苑の伝にならい、温泉のそなわる箱根保養所での開催に方向を転換することにした。ちなみに無垢苑は福島県磐梯熱海温泉の、もと温泉宿を奥羽大学が研修所として買い取ったものであって、当時副学長をされていた莊司格一先生のお世話になったものであった。三回の神奈川大学の箱根保養所と二回の奥羽大学保養所無垢苑での夏合宿開催が契機となって、合宿は温泉施設でというのがその後しばらく定例となつたが、いつしか私を含む老兵の参加が減ってきたこともあって、近頃はそうでもなくなってきたことは残念である。

ひるがえって、この時期の合宿は、拙文二に書いたように、あらかじめテーマを定め、それに関連する発表を募ることになっていた。以下にそのテーマを挙げておく。

「小説」とは何か—「小説」研究の対象、伝承と記録—志怪伝奇の「場」

第2回

馮夢龍及び「三言」について、明清の文言小説 第3回

小説研究への様々なアプローチ 1、2、明末清初 第4回

都市と小説 第5回

戯曲と小説 第7回

物語と小説について、才子佳人小説をめぐって 第8回

金瓶梅から紅樓夢へ、志怪・伝奇 第9回

変文と小説、芸能と小説・文学、明清をめぐって 第10回

ご覧のように、テーマの大半は複数の発表を束ねうる融通無碍のものであり、すべてが所期の目的を十分達したとはいえないかった。筆者としては、拙文二に記した通り、第2回の「「小説」とは何か—「小説」研究の対象」と第5回の「都市と小説」が記憶に残っているのだが、ここでは、司会を務めた金文京さんに参加を要請されながら準備がないと断ったため、それが永く負い目になった、京大会館で開催された第10回の「変文と小説」について追記しておこう。「変文と小説」は第一日目の午後に開催され、金さんが司会と発表をされた他、渋谷譽一郎、松尾良樹、小南一郎、Victor H. Mair という錚々たるメンバーが発表をされたのだが、入矢義高先生が参加されており、その場になんとも表現しがたい雰囲気が漂っていたことが記憶に残っている。そのためか、その晩の宴会では、誰も入矢先生の隣に座ろうとせず、金さんから指名を受けた筆者が座ることになったように記憶している。ちなみに上述の負い目については、近年「項託と関羽」（『稻畑耕一郎教授退休記念論集 中国古籍文化研究』所収、東方書店、2018年3月）と「物語りから読物へ—敦煌話本にみる、登場人物の発話表示に関する試みと混乱」（リベラルアーツ叢書12『書くこと／書かれたもの—表現行為と表現—』所収、埼玉大学人文社会科学研究科、2021年3月）を書い

て、やっと負債を返した気がしている。

次は『中国古典小説研究動態』（以下では『動態』と簡称する）と鈴木さんの係わりについていざか述べたい。拙文二で『動態』を紹介する際、掲載を依頼した会員外の、主として中国の研究者のお名前を挙げさせていただいた。いかにも国際的な研究誌のような印象を与えたかも知れないが、事実は寄稿してくれる会員の数がたらず、筆者ひとりでは毎号百頁の半分を埋めるのがせいぜいであったから、それまでに交流のあった研究者に原稿を依頼した側面が強かった。『動態』の創刊号から第5号までと最終号のあわせて六冊に複数回寄稿してくださった会員は、鈴木さん。金さん（三代目の代表）のほかでは、笹倉一広さん（五代目の代表で創刊号に「増補中国通俗小説書目書肆名索引」を発表してくださり、四代目までの代表を事務局として支えてくださった）、岡本不二明さんだけであった。

鈴木さんは創刊号に「中国小説研究のニューウエーブ」（1987年10月）、第2号に「岐路に立つ小説研究—テクストの解読と解体されるテクスト—」（1988年10月）、第3号に「農村の神話から都市の物語へ—再び小説研究の方法について—」（1989年12月）、第5号に「小説の読み方—『西遊記』の批をめぐって—」（1991年10月）など、極めて問題意識の高い力作を寄稿してくださった。筆者などには逆立ちしても書けない文章であり、啓發されるところも極めて多かった。後に『動態』を中国古典小説研究会の会誌として生まれ変わらせてくださった金さんとともに、鈴木さんは『動態』の恩人といってよい存在である。

鈴木さんの、最後ではないかもしれないが、おそらく最大の中国古典小説研究会への貢献は、2016年9月の先に言及した国際シンポジウム「中国古典小説研究三十年の回顧と展望」の開催であろう。当時副学長であった鈴木さんなくして、このシンポジウムが開催されたとは思えない。加えて『アジア遊学』という一般誌にそこで発表された報告が複数翻

訳紹介されたことも大きい（ただし翻訳の質は必ずしも高くはなかったが）。中国古典小説研究会の会員には筆者を含め内向的な者が多く、日本中国学会を含む外部への自己主張に欠けるところがあったからである。だがこのシンポジウムについてはこれ以上筆者が贅言することはしない。以上、鈴木さんはこれまで神奈川大学と中国古典小説研究会のために大車輪の活躍をなさってきたわけであり、研究業績をまとめる時間を持たれなかつたかと拝察する。退休後は、在職中も退休後も惰眠をむさぼっている筆者などにならわず、いち早く業績をまとめられることを切に希望したい。